

# ネクスト・スタンダード・アルバムを探せ

新たな視点を模索する  
サクセス・プレイヤーたち

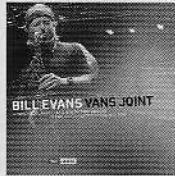
ジャズ・サクセス  
ザ・ネクスト

『ムーヴメンツ・イン・カラー』  
アンディー・シェパード  
ユニバーサル  
(ECM)  
UCCO-1113



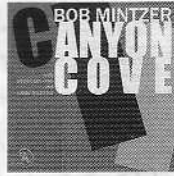
ジャズ・ファンにとってシェパードといえば、カラー・ブレイ(p)バンドでの活躍が最も印象的だろう。しかし、本作はWATTからではなく、ECMからリリースされた初リーダー・アルバムだ。聴いてみると、1曲目はまるで「ジャズランド・レーベル」のようなサウンド。随所でアイヴァン・オルセツト(g)の空間系の想像力がふんばりに発揮されている。エレクトロニクスを駆使し、リズムにタブラを起用するあたりは、ニルス・ベクター・モルヴェル(tp)などのアイデアと似ているが、タブラの使い方はどこかかといふと「オレゴン」寄りなのかもしれない。イギリスのジャズ・シーンで代表するサクセス・プレイヤーが、国際色豊かなメンバーとがっばり四つに組んだ力作。

『ヴァンス・ジョイント』  
ビル・エヴァンス  
BHM(海外盤)  
BHM1038



マイケル・ブレッカー(sax)やジョー・ザヴィヌル(p, kb)などに代表されるように、近年自己のオリジナルをビッグバンド・アレンジするミュージシャンが増えているが、本作もビッグバンドを従えての作品だ。バックを務めるのは、やはり多くのミュージシャンとの共演で活躍するWDRビッグバンド。所々で柔らかいホーン・アレンジも顔をのぞかせるが、全体を通してビル・エヴァンス(sax)の楽曲の持つ陽気で歯切れの良い、アメリカンな色が前面に出ている。マイルス・デイヴィス(tp)のDNAを受け継ぐアーティストとして、シーンでも独自の活動が目につくビルだが、ここでもオリジナリティ溢れるプレイを披露。優れた楽曲は、形態(アレンジ)を変えてもその中で新たな輝きを放つ。

『キャニオン・コウ』  
ボブ・ミンツァー  
ポニーキャニオン  
(Cheetah)  
PCCY-30160



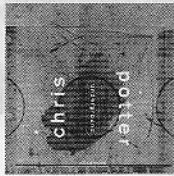
サクセス奏者として、またビッグバンド・リーダーや指導者としても活躍するボブ・ミンツァーのスタジオ最新作は、ラリー・ゴールディングス(org)と、盟友ビクター・アースキン(ds)とのオルガン・トリオ編成。小人数のフォーマットならではのインテンシブなサウンドで聴ける、ミンツァーらしいクールなオルガン・アルバムに仕上がった。また、今回は1983年にリリースされた自身のビッグバンド・アルバム「ババ・リップス」の中から、タイトル曲他「トゥルース」、「ミスター・フォーンボーン」が新しい解釈で演奏されている。リリースから27年という歳月を経てなお新鮮な響きを残すこれらの楽曲から、彼のコンポーザー/アレンジャーとしての手腕にも注目したい。

『メタモルフォーゼン』  
ブランフォード・マーサリス  
ユニバーサル  
(Marsalis Music)  
UCCM-1167



ジェフ・ティン・ワッツ(ds)、ジョーイ・カルデラック(tp)、エリック・レヴィス(b)とのレギュラー・クアルテットでの2009年作。アルバム・リリースだけを見れば、彼らは2000年の「コンテンポラリー・ジャズ」以来約10年間、同じメンバーで活動を続けてきたことになる(このアルバムを発表後、ドラマーが交代)。人間性を深く知りあうような長い付き合いのミュージシャンたちによって作り出されるサウンドは、内面的な繋がりを感じさせる。アルバム・リリースのたびに新たな一面を見せつつも根底に流れているものが変わらないのは、不動のメンバーだからこそ成せる業なのかもしれない。それをこの「変形・変容」という意味のタイトルと合わせて考えると、彼の精神哲学の一端を垣間みることができる。

『ウルトラハンク』  
クリス・ポッター  
Artistshare  
(海外盤)  
AS0080



いまや押しも押されぬトップ・プレイヤーのひとりになったクリス・ポッターによる、プロジェクト「アンダーグラウンド」名義での3枚目のアルバム。このプロジェクトを始めるとクリスは、どちらかといえば、まだ「大勢のミュージシャンのうちのひとり」だった。そんな彼が様々なフォーマットやスタイルを試行錯誤した末、たどり着いたのが「アンダーグラウンド」。ベースレスの編成だが、ボトム(低音)が強い感じもなく、物足りなさを感じない。ジャズ・バンドに近いスタイルではあるが、完全に即興的ではなく、どこか統制されたシステム的なサウンドも感じられる。アコースティック感を前面に出した上で、各楽器の音の絡みを重視しており、俗に言うジャズ・バンドと一線を画しているのはそのあたりだろう。

『ライフタイム』  
ダニエル・スカナビエコ  
Picanto Records  
(海外盤)  
PIC011



近年のイタリア・ジャズの勢いには目を見張るものがある。特に若手のミュージシャンの台頭が著しく、ダニエル・スカナビエコも注目を集める実力派ミュージシャンのひとりだ。筋肉質な身体を活かして、イタリア生まれの名器「ランボネ・カッツァーニ」から野太いトーンを響かせる彼は、ファブリツィオ・ボッツ(tp)との2管による「ハイ・ファイブ・クインテット」での活躍で一躍ジャズ・ファンに知られる存在となった。伝統的なハード・バップ・スタイルを基調にしつつ、独特なハーモニー感覚で綴るフレーズからは、現代的なサウンドも感じられる。サイドメンとしては多くのアルバムに登場しているが、リーダー作はまだ少ない。これから楽しみなプレイヤーだ。

『ターンアラウンド』  
デイヴィッド・リーブマン  
Jazzwerkstatt  
(海外盤)  
JW079



デイヴ・リーブマンは多作家で、近年もハイペースでアルバムをリリースしているが、実は他のミュージシャンのカヴァー曲集のリリースが比較的多い。今作も例に漏れず、サブ・タイトルには「ザ・ミュージック・オブ・オーネット・コールマン」の文字が。今作は、一見コミカルに映るオーネットのフレーズを、その優れた洞察力で精神性まで見事に表現することに成功。まさにリーブマンにしかできない作品となった。「ロンリー・ウーマン」など、多くのミュージシャンが取り上げ、もはやスタンダード・ナンバーとなっているものから、バット・メセニー(g)との共作「ソングX」に収録されている「キャサリン・グレイ」まで、オーネットの新旧の名曲たちが、新たな表情を覗かしている。

『カルチャル・サヴァイヴァル』  
ダヴィッド・サンチェス  
ユニバーサル  
(Concord Picante)  
UCCO-1048



ニューヨークを中心に活動を続けて、アブルト(g)出身のサクセス・プレイヤー、ダヴィッド・サンチェス。ラテン・グラミー賞を受賞した「コラール」に引き続きのリーダー作で、コンコード・レーベル第1弾の作品。アフロ・キューバンやカリビアンの影響を受けたジャズという印象こそ受けけるが、決してラテン・ジャズではない。ゲストに(パナマ出身の)ダニーロ・ペレス(p)が参加しているが、彼もまたラテンの色を前面に出すことはなく、ウェイン・ショーター・グループでのアプローチと同様に空間の縫うように音を紡ぎだしていく。コルトレーンのようなアプローチの曲あり、コンテンポラリーな曲もありと、ヴァリエーションに富みながらも、1本筋の通った作品に仕上がった。

『ドウェル・タイム』  
ハコン・コーンスタッド  
Jazzland/Emercy  
(海外盤)  
2709710



オスロ出身のハコン・コーンスタッドは、1998年に「ジャズランド・レーベル」と契約して以降、自己のプロジェクトを中心に活動を続けてきた、ノルウェー・ジャズ界の中心人物のひとり。本国を代表するユニット「アトミック」の初期メンバーでもある。2009年にリリースされた本作は、ソロ・プロジェクトの第2弾で、ループ・マシンを使ったサクセス・ソロ作品。ループ・マシンをリアルタイムで操作しながらサクセスでインプロヴィゼーションを展開していくには、並外れた集中力と想像力が必要となる。しかし、ひとりですべてを完結できるとすれば、そこにはミュージシャンのイメージする世界のすべてが広がっているはずだ。ミュージシャンの表現にとってこれほど完璧なものはないだろう。

『スロー・プロセッショ』  
ヤンス・ユリック  
STUNT RECORDS  
(海外盤)  
STUCD 09152



デンマークのジャズ・レーベル、「スタンド」からリリースした一連のリーダー作で、一躍日本でも有名になったヤンス・ユリック。自国のジャズ・シーンを牽引するミュージシャンのひとりだ。2010年リリースの本作は、アイヴァン・オルセツト(g)、オウドゥン・クレイヴ(ds)、アンデルス・ヨルミン(b)のギター・トリオをバックにしたクインテット作。アルバム・タイトルが示すようにゆったりとした時間の中でお互いの意識が交錯しあい、その中で何かとんでもないものが生れ出るような、そんな世界を余すところなく表現している。絶え間なく続く、張り詰めた緊張感の中でいつ何が起るのか、耳を澄まし続ける楽しさとある種の恐怖を体験できるそんな作品。じっくりと腰を据えて聴きたい1枚。

『プレゼント・テンス』  
ジェイムス・カーター  
ユニバーサル  
(Emercy)  
UCCM-1146



ジェイムス・カーターは、ソプラノからバス・サクセスまでを吹きこぼすマルチ・リード奏者。ロートン製のメタル・マウスピースを思い切り息を吹き込み、ファットなトーンからフリーキー・トーンまでを自在に操るテクニシャンだ。端正なバッドをプレイしたかと思えば、超絶なテクニックを駆使して一気にフリー・ジャズに近いところまでなだれこむなど、今作でも豪放磊落なプレイを聴かせる。伝統と革新性を併せ持つスタイルにはファンも多く、近年ではディー・ディー・ブリッジウォーター(vo)の「トゥー・ビニー・ウィズ・ラブ」、フロム・ディー・ディー、ジョン・メデスキ(org)との共作「ヘヴン・オン・アース」などのアルバムでも、その管奏ぶりを驚かすことができる。

『ドレスデン』  
ヤン・ガルバレク  
ユニバーサル  
(ECM)  
UCCF-7005



ヤン・ガルバレクのライブ音源と言え、キース・ジャレット(p)のヨーロッパ・クアルテットによる「ノード・アーツ」が有名だが、ガルバレク名義では初のライブ・アルバムというのも意外な気がする。2007年に長年グループに在籍していたエバーハルト・ウェーバー(b)が病気のためグループを抜け、代わりにユリ・ダニエル(b)が参加。かなり音楽性にも変化があるかと思いきや、そんなことはまったくなかった。収録曲は、ガルバレク・グループの長い歴史を物語るように新旧取り揃えている。音色、音楽性、フレーズなど、すべてが独創的で、すでにガルバレクの作りだす音楽は「ジャズ」ではなく、誰も真似できないひとつの新しい音楽と言ってもいいのかもしれない。

ジャズの歴史を振り返ると、ソニー・ロリンズの『サキソフォン・コロッサス』、ジョン・コルトレーンの『バラッド』、ウェイン・ショーターの『ジュジュ』など、多くのサクセス・アルバムがその時代を作ってきた。そして、多くのリスナーから愛されるこれらの名盤の他に、21世紀の今日も重要な作品はまだ数多くリリースされている。ここではサクセス・プレイヤーのリーダー作として近年にリリースされたアルバムの中から、重要な作品をピックアップしてお届けしよう。

『リメンバリング・ソーズ・フー・ワー』  
イェスパー・シロ  
STUNT RECORDS  
(海外盤)  
STUCD 09062



これまでに、スタント・レーベルから多くの良作をリリースしてきた、デンマーク・ジャズの大御所プレイヤー、イェスパー・シロ。本作はオーソドックスなクアルテット編成にストリングスを加えた作品。アルバム全編を通して、スウィング・ジャズ時代にタイム・スリップしたかのようなノスタルジックなサウンドに仕上がっており、とても最近リリースされた作品とは思えない。普段からスタンダードを演奏することが多いイェスパーだが、本作も「ホエン・サニー・ゲッツ・ブルー」、「アイ・リメンバリー・クリフォード」など、ストリングス・アレンジとの相性が抜群のスタンダード揃い。20世紀のモノクロ映画をふと連想するような、そんな作品。

『プリユスターズ・ルースター』  
ジョン・サーマン  
ECM  
(海外盤)  
2701112



ジョン・サーマンとジャック・ディジョネット(ds)の名前が並ぶと、30年ほど前にリリースされた「サイモンの不思議な旅」を思い出してしまう人も多いのではないだろうか。それだけこのふたりのデュオの作品は当時衝撃的だったのだが、実はECMレーベルからこのデュオは他に何作かリリースされている。2009年に発表された本作は、デュオではないが、ディジョネットとジョンのふたりでは表現しきれない部分をジョン・アバークロンビー(g)とドリュー・グレス(b)が補完しているような感じで、より完成されたふたりの世界が楽しめる作品と言っていだろう。相変わらずフリーな世界が全開で、どちらかというと情景描写が強く、想像力をかきたる作品に仕上がっている。

『コンパス』  
ジョシュア・レッドマン  
ワーナーミュージック  
(Nonesuch)  
WPCR-13355



自身で音楽監督を務めた「SFジャズ・コレクティブ」や、エラストック・バンドなど、これまで多種多様なフォーマットを模索し、コンテンポラリー・ジャズの中心人物のひとりとして活動を続けてきたジョシュア・レッドマン。コード楽器を使用せず、ドラム、ベースとのトリオで構成された本作は、シンプルながら彼の深い音楽性が感じられる。また、このような、表現力がよりシビアに問われる環境に身を置き、演奏する姿勢からは表現者としての面とは別に、研究者や修行者のような一面も見てとることが出来る。本作を聴く限り、今後もジョシュアはよりストイックにサクスの表現方法を突き詰めていくのだろう。独創的でありながら、すでに完成したサウンドだ。

『スケッチズ・オブ MD〜ライヴ・アット・イリディウム』  
ケニー・ギャレット  
ビデオアーツ  
(Mack Avenue)  
VACM-1371



ニューヨークのジャズ・クラブ「イリディウム」におけるライヴを収録した作品。タイトルの「MD」は、マイルス・デイヴィス(tp)のこと。このことからわかるとおり、今でもギャレットは自身のルーツとしてマイルスを大切にしているようだ。今作に収録されたオリジナル「スケッチズ・オブ MD」では、まさにタイトル通り、ギャレットが在籍していた頃のマイルス・バンドをイメージさせる。また、ケニーの前作「ビヨンド・ザ・ウォール」で共演したファロオ・サンダース(ts)も参加。熟っぽいプレイで花を添えている。収録された5曲すべてがギャレットのこれまでの音楽人生を集約したような内容になっており、彼の音楽性を理解する上でも重要な1枚と言えるだろう。

『ライヴ・アット・ザ・ヴィレッジ・ヴァンガード』  
リー・コニッツ  
ワードレコーズ  
(Enja)  
VQCD-10135



1940年代後半から大きな休養をとるとともに、ほぼ毎年リーダー作をリリースし続けるなど、いまもなお第一線で活躍しているジャズ・レジェンド、リー・コニッツ。マイルスをはじめ、スタン・ケンントン(ldr)、ギル・エヴァンス(p,arr)、ジェリー・マリガン(bs)ら名だたるトップ・ミュージシャンたちとの共演で経験を積み、進化し続けてきた。その結果、現在最も先進的なスタイルのひとつとして、ニューヨークをはじめとする世界各地で多くのフォロワーを生んでいるという事実も、彼の音楽性の偉大さを表わしているといえるだろう。今回は、前作でも共演したフーリアン・ウェバー率いる「トリオ・ミンサラ」とともに、前衛的な表現の粋を極めるような音楽を展開している。

『ロスト・オン・ザ・ウェイ』  
ルイ・スクラヴィス  
ECM(海外盤)  
1798497



フランスの鬼才、ルイ・スクラヴィスは、クラリネット奏者としての印象が強いかもしれないが、ソプラノ・サクセス奏者としても素晴らしい演奏を数多く残している。クラシックの室内音楽のようなスタイルで、ECMレーベルの中でも独自の路線を歩んでいるが、今回もそのスタンスは変わらない。いち早くエレクトロニクスを取り入れたりするなど、常に新しいものを取り入れてきたが、どんな変化があろうと常にそのスタンスにブレが感じられないのは、まずコンセプトありきで新しいものを取り入れていくからだろう。本作は、ルイの抒情的で美しい世界観が十二分に発揮されたクインテット作。目を閉じると、何かしら情景や物語が浮かんでくる、そんな作品に仕上がっている。

『インスピレーション』  
マックス・イオナータ  
アルボーレ  
ALBCD-004



イタリア・ジャズの良作を日本に紹介する「アルボーレ」から2009年にリリースされた、マックス・イオナータの国内初リーダー作。ワンホーン・クアルテットの王道をいく、オーソドックスなハード・バップが楽しめる。イタリア人プレイヤーの多くが幼少からクラシックの養育があるため、テクニクは抜群。クアルテットでスタンダードを演奏……よくあるコンセプトであるだけに、演奏する側にもセンスと音楽力が必要になるが、マックスはこの作品でまさにハードルを超えてみせた。それまで知名度が低いとは言えなかったマックスだが、この作品のヒットで、彼の名は日本のサクセス・ファンの間にも広く浸透したのではないだろうか。まだ若いプレイヤーだけに、次回作以降も気になるだろう。

『ゴーン』  
リッチ・ベリー  
STEEPLE CHASE  
(海外盤)  
SCCD31670



リッチ・ベリーは、マリア・シュナイダー(p,arr)のビッグバンドや、サド・メル・オーケストラにも在籍し、ビッグバンドのセクション・プレイヤーとして数々の名演を残してきているテナー奏者だ。コンボでもサイドメンとして、フレッド・ハーシュ(p)やジョージ・ムラーツ(b)をはじめ、多数のミュージシャンから厚い信頼を受けており、隠れた名演も多い。本作は、そんなリッチが10年以上も演奏し続けているメンバーたちと作り上げた作品。お互いを良く知ったメンバーによる演奏には、音楽的にも安心感がある。リッチのサクスは、バリバリ吹きまくるといふよりもどちらかと言えば落ち着いた聴かせるタイプ。緊張感ではなく、包容力のあるジャズと言えよう。

『レニーズ・ベニーズ』  
ロザリオ・ジュリアーニ  
Dreyfus  
(海外盤)  
FDM36952



テナー・サクセスと聴き違えてしまうような、太い音色と、超絶プレイジングが持ち味のアルト/ソプラノ・プレイヤー、ロザリオ・ジュリアーニ。先に紹介したマックス・イオナータや、ダニエル・スカナビエゴと同様にイタリア出身のプレイヤーだ。イタリア・ジャズの巨匠、エンリコ・ピエラヌツィ(p)にも認められ、デュオで共演したりとその実力は同僚のプレイヤーの中でも秀でている。一気呵成に吹きまくるハード・パピッシュなプレイから、熱く歌い上げるバラッド、モード・ジャズまで、幅広いプレイ・スタイルを持っているが、今作ではヴァラエティに富んだ楽曲が並び、彼の幅広い音楽性を味わうことができる。未だ日本でのライヴがないだけに、来日公演が待たれる。

『リブラ』  
ティム・ガーランド  
Global Mix  
(海外盤)  
GM2CD03



チック・コリアのオリジナルで唯一有名になったティム・ガーランドだが、ビル・ブラッフォード(ds)のユニット「アースワークス」に参加して以降は、より一層現代音楽やプログレ色が強くなっているようだ。本作は、ティムとグウィリム・シムコック(p)、アサフ・シルキス(perc)の3人によるトリオをメインに、ロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラが参加した2枚組のアルバム。オーケストラの参加した「フロンティア・スイート」は、壮大なスケールの組曲で、未開の地を求めて宇宙を旅するような壮大さを感じさせる。また、本作に収録されている「パホ・デル・ソル」は「アースワークス」でも演奏しているが、トリオでの演奏は、より洗練され濃密な演奏に仕上がっている。

『トラヴェラー』  
ティネカ・ボスマ  
フィフティ・ファイブ  
FNCJ-5537



ティネカ・ボスマは、オランダ出身の女性サクセス奏者。学生時代にマンハッタン音楽大学でクリス・ポッター(ts)やデイヴ・リーマン(ss)に師事し、プレイスタイルにもその影響が色濃く表われている。これまでに発表したアルバムはどれも高い評価を得ており、芯の太いアグレッシブなプレイ・スタイルには日本でもファンが多い。このアルバムは、ドラマの「テリ・リン・キャリントン」が、2002年にティネカと出会ったことがきっかけで始まったプロジェクトによるもの。テリ・リンをはじめ、スコット・コリー(b)、ジェリー・アレン(p)ら素晴らしいメンバーのサポートを得て、ティネカもアグレッシブなプレイを展開している。彼女はまた30代になったばかり。今後の動向も注目される。

『ルーシダ・グレイ』  
トール・ブリュンボルグ  
DRAVLE RECORDS  
(海外盤)  
JZ090227-02



トール・ブリュンボルグは、1960年生まれの子供サクセス奏者。ノルウェーのトロンハイム音楽院でジャズを学んだ後、ヨン・バルグ(p)を中心としたユニット「オスロ13」に参加。このメンバーは、コリス・ベッター・モルヴェル(tp)など、今まさにノルウェー・ジャズ界を牽引しているミュージシャンばかりだった。その後シーンで活躍し始めた、近年はマヌ・カチエ(ds)やトルド・グスタフセン(p)ら、ECMミュージシャンのアルバムへの参加も増えている。本作は、トールの得意とするサクセス・トリオによるもの。透明感のあるサウンドは彼ならではのものだ。また、今年4月にはケイティ・ビヨルンスタ(p)、ジョン・クリステンセン(ds)とのトリオ名義で、ECMより「リメンバランス」(海外盤)もリリースした。